

繫辭伝における『変化』の理論の展開

山下 静 雄

Shizuo YAMASHITA

序

繫辭伝について今まで私が学会に於て発表した内容は主として成立年代の決定を主とするもので、その要点は次の通りである。

- 1 繫辭伝は象伝以後の思想を示している。だから、その成立は象伝以後である。
- 2 繫辭下伝が先に成立し、上伝は後から成立した。
- 3 下伝は乾坤二元論が成長する過程の思想を示す資料である。
- 4 上伝は一元論が誕生する途上の思想を示す資料である。

この論文は上の論証を承けて、繫辭伝に現われた周易思想の中、『変化』の概念を説明する理論的根拠の、発展展開を明らかにしようとするものである。

繫辭伝は下繫も上繫も共に易の本質は『変化』(變動)であると規定する。然らばその『變動』の本質、言換えれば變動の原因をどのように説明するか。その説明のしかたに下繫と上繫の間にどのような差異と展開が認められるか。これらの問題を次に明らかにしてみよう。

1 繫辭下伝の説明のしかた

繫辭下伝には変の思想は『変』(1,6,12,42)『変化』(55)『変通』(2)『變動』(42,51,58)の概念で表現されている。下伝は変を動詞として使用せず実体的に把握し、下繫に見える変の哲学は二つの方向に展開する。一は變動の方向であり、他は変通(変じて通ずる)の方向である。

「道に變動があるから爻と言うのだ」(51)、「易の書というものは遠ざけてはならない。道というものは、屢々遷り變動して居まらない。六虚に周流し、上下常なく、剛柔相易^{たがひにかわ}つて典要となすことはできない。たゞ変じて適くところのまゝである」(42)。變動こそは道の本質であると説く。こうした道の變動を易は象徴するのである。易というのは何を意味するか。「八卦が列をなせば象がその中にある。因つてこれを重ねると爻がその中にある。剛と柔が相推^{たがひにうつ}ると変がその中にある。辞を繫けてこれを明〔命〕らかにすると動がその中にある」(1)というところから察すれば、易の六画卦中の剛柔の爻が相推移するところに變動は象徴され、その變動は卦爻に繫けられた辞によつて明らかにされるというのである。

第二の変通とは何であろうか。「その変を通じて民を倦ましめないようにする。神にしてこれを化し、民を宜しくする。易は窮すれば変じ、変ずれば通じ、^(註1)通ずれば久しい。だから『天が祐け吉にしてよろしからざるはない。』」^(註2)變動は道の現象であり、人を離れて存在するが、「変を通ずる」ことは人のわざである。即ち変通は人間の実践の学である。道は變動する。各個人はこの變動

にうまく合致するように行動しなければならない。「変通は時に趣くものである。」⁽²⁾とはこのことを言つたものである。時に従つて行動し、変化に適応できればよい結果〔吉〕が生じ、そうでない場合は悪い結果〔凶〕が人間の上に生じてくる。「吉・凶・悔・吝は動より生ずるものである。⁽²⁾「變動は利を言う」⁽⁵⁸⁾と言ひ、「功業は変に見われる」⁽⁶⁾、「是故、^{だから}変化云為、吉事には^{さいわい}祥がある」⁽⁵⁵⁾とも言つている。変化に適応する人間の行動や態度の規定、これが通変である。「爻象が内に動くと吉凶が外に見われる」⁽⁶⁾から、人間は易の爻象によつて変化を理解し、変化に適応するように行動しなければならない。

いかにして変化に適応しうるか。それは『幾』を知つて行動することによつてあると説く。これが下繫の到達した行動の哲学の頂点であるが、このことは『人間形成の理論の展開』で詳細述べられるであろう。

一体『變動』(変化)はどこから、どうして生ずるのであろうか。この変化の原理の説明を求めると、下繫には三つの説明原理が用意されているように思われる。第一は情による説明であり、第二は男女の生殖による説明、第三は陰陽による説明である。

(イ) 『情』による変化の原理の説明

「八卦は象もて告げ、爻象は情もて言う」⁽⁵⁷⁾

「變動は利を言ひ、吉凶は情もて遷る」⁽⁵⁸⁾

「情偽相^{たがひに}感じて利害が生ずる」^{(58)(註2)}

これらの表現がそれである。然らば情とは何であるか。情の本質は何であらうか。こう反問するならば、下繫にその解答を発見することはできない。下繫は情を証明せずとも読者に明らかに理解されうるものと解しているらしく、定義をしようとしなければ、理論的反省を加えようもしない。「聖人の情は辞に見われる」⁽⁶⁾、「かくて始めて八卦を作つて神明の徳を通じ、万物の情を〔分〕類した」⁽⁸⁾と説き、「易の情は近くして相得ないときは凶である。これを害する者がおこり、悔且つ吝である」⁽⁵⁹⁾と、聖人の情、万物の情、易の情として説くところから察すれば、人間における感情から類推したものであろう。情についての説明は下繫にはこれ以上を求めることはできない。

(ロ) 人間の生殖による説明

「天地綱縊して万物が化醇し、男女が精を^{がつ}構して万物が化成する」⁽³²⁾と説くのがこれである。万物変化の原因を男女の生殖との Analogie で説くのである。

(ハ) 陰陽による説明

「乾坤〔天地〕はそれ易の門であらうか。乾は陽物であり、坤は陰物である。陰陽が徳を合して剛柔に体があり、以て天地の撰を体し、神明の徳を通ずる。」⁽³¹⁾というのがこれである。

2 繫辭上傳の説明のしかた

『変化』とは何であるか。それはどこから、どのようにして起るかという問に対する上繫の説明は次の五つに分れる。

1 男女の生殖による説明(下繫にも見える)

- 2 『陰陽』による説明 (同 上)
- 3 『道』による説明 (上繫だけに見える)
- 4 『神』による説明 (同 上)
- 5 『数』による説明 (同 上)

下繫と比較するに、下繫に見えた情による説明は上繫には見えない。(註3) 第一、第二の説明は下繫にも見え、第三一五の説明は下繫には全然発見できず、上繫だけに見えている。

1 男女の生殖による説明

下繫は「天地が綱縊して万物が化醇し、男女が精を構して万物が化生する」(註2)と説いているが、上繫では「乾道は男となり、坤道は女となる」(註3)と乾坤と男女を結合する。「乾は陽物であり、坤は陰物である」(註34)という下繫の思惟の当然の展開であろう。更に、

「かの乾はその静かなるときは専、その動くときは直、こうして大いに生ずるのである。かの坤はその静かなるときは翕^とぢ、動くときは闢^{ひら}く。こうして広く生ずるのである。」(註18)

と説いている。こゝには下繫の『男女構精』が極めて具象的に活叙されている。又、

「戸を闢づるを坤といふ、戸を闢くを乾といふ。一闢^{とちたり}、一闢^{ひらいたり}することを交^まといふ、往つたり来たりして窮らないことを通^とといふ。」(註45)

とも説いている。

下繫から上繫への展開は、(一)男女を乾坤に結合し(註3) (二)乾坤の変化を男女の生殖によつて説明する(註18)ところにある。

2. 陰陽による説明

上繫は「陰陽の義は日月に配する」(註19)という。陰陽を天体における日月に帰しようとする。「変通は四時に配する」(註19)と言い、「変通は四時より大なるものはない」(註47)というところから見れば日月の変通、言換えれば天体における日月の運行、その消息盈虚を意味するものであろう。「変化は進退の象である」(註15)というのもこれであろう。(註4) このようにして上繫は陰陽の概念で天体〔における日月の運行、消息盈虚〕の変化の原因を説明しようとする。この思惟の様式は陰陽二元論である。これが陰陽による変化の説明の第一の型である。

第二の型が登場する。それは道、神という新しい概念を導入して陰陽二元で解釈し、この道、神という新しい概念で一元的に変化の原因を説明しようとするものである。「一陰一陽之謂道」(註14)、「陰陽不測之謂神」(註16)というのがこれである。

——陰陽の二元論から一元論への展開を次に明らかにしよう。

3 道による変化の説明

「一陰^{いんとなつたり}、一陽^{ようとなつたり}するものを道という。これに継ぐものは善であり、これをなすものは性である。仁者には仁に見えるが、知者には知に見える。百姓は日^{にち}用^{にち}いるが知らない。だから君子の道は〔知る人が〕鮮い。」(註14)

「これを仁に顕^{うご}わし、これを用に載^かする。万物を載^{うご}して聖人と憂を同じくしない。げに盛徳大業至れるかな」(註15)

この「一陰一陽」は、天体が運行し、消息盈虚する変動から抽象化したものであろう。道は形而上なものである。「乾坤はそれ易の緼であろうか。乾坤が列を成すと易がその中に立つのだ。乾坤が毀るれば易を見ることはできない。易を見ることができなければ乾坤は息つたも同然だ。(52) 是故…形而上なるもの、これを道というのだ。」(53)と説いている。

—こうして陰陽の二元は道の一元に高められた。下繫は道に変動があること(51)、道が屢々遷り、変動して居らず、六虚に周流する(42)ことは明らかにすることができたが、その変動の理由はついに説くことはできなかつた。今や、上繫は道、すなわち「陰となつたり、陽となつたりするもの」を導入して説明しようとするのである。

4 神による変化の説明

「陰陽はかられざるもの、これを神という。」(16)前に「陰となり陽となるもの」の規定されたものが更に一步すすめられる。陰陽不測とは、陰となり陽となる変化が人間の認識を超越することである。そうした性質を神という概念で規定している。

又他の所では「利用出入、民が咸用いるもの、これを神という」(45)とも規定している。「仁者には仁に見え、知者には知に見える。百姓は日用いるが知らない」(14)と言つたものであろう。

変化の神変不可思議な性格を抽象して神の概念で表現しているが、神の概念は更に実体的にも規定されている。このことは別の項で明らかにしよう。

5 数による変化の説明

下繫には数の哲学は見えない。(註5) 上繫に至つて始めて変化の説明原理として数が登場する。それは主として占筮の立場からの説明である。

「数を極めて〔未〕来のことを知るのを占という。」(16)

「卜筮しようとする者はその占を尙ぶ。(35)是故、君子は何かしようとするとき、何か行わうとするときは、これに問うてから言うがよい。その命を受けること響の〔物に応ずるが〕如く、遠近幽深の別なく遂に〔未〕来の物を知る。天下の至精でなくて孰れがこれをなし得ようぞ」(36)

「参伍して変じ、その数を錯綜し、その変を通じて遂に天下の文を定め、その数を極めて遂に天下の象を定める。天下の至変でなくて孰れがこれをよくし得ようぞ。」(37)

—かくその数を極め(16, 37) その数を錯綜して(37) 未知を知ることができる。これが占筮である。占筮の方法は次の通りである。

「大衍の数は五十、そのうち四十九を用いる。二つに分けて両に象り、一を掛けて三に象り、これを四で揲えて四時に象り、奇を扚に歸して閏に象る。五歳に閏〔年〕が再びあるから、再扚して後に掛ける。」(29)

「天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十(41)。天の数が五、地の数が五、五位相得て各々合すると、天の数が二十五、地の数が三十、天地の数合して五十五となる。これは変化をなして鬼神を行う所以である。」(30)

「乾の策が二一六、坤の策が一四四、合計した三百六十は期の日〔数〕に当る。二篇の策一万一千五百二十は万物の数に当る。」(31)

「^{だから}是故、四營すると易が成り、十八變すると卦が成る。八卦が小成すると、引いてこれを伸ばし、類に触れてこれを長じ、天下の能事が畢る。」⁽³²⁾

——こうしてその数を極め、その数を錯綜する占筮の方法が説かれるが、占筮の目的は、「道[・]を[・]顕[・]わ[・]し[・]徳[・]行[・]を[・]神[・]〔[・]靈[・]〕にする。^{だから}是故、〔神と〕^{おうた}酬酢することができ、神を祐けることができる。」⁽³³⁾

「子曰く、變化の道を知るものは、其^{まさしく}神の為すところを知るものであろう」⁽³⁴⁾
 と言える如く、道[・]を[・]顕[・]わ[・]し[・]徳[・]行[・]を[・]神[・]靈[・]にし、神を祐けることである。占筮が人の実践哲学に結合するのはこの理由によるのである。

——上繫は変化を説明するために道、神の概念を導入してきた。その道も神も形而上のものであり認識を越えた存在で、その変化は測り知るべからざるものである。この測り知るべからざるものをいかにして知るか。それは数を錯綜する占によつて知ることができると主張するのである。

今、これを下繫と比較するに、数の哲学は下繫には全然見えず、上繫に至つて始めて登場するのである。占筮のことも下繫には「事を占つて〔未〕来を知る」⁽³⁵⁾と見えるのみである。

- 註 1 釈文によれば、一本には変則通の三字がない。(陸徳明撰、經典釈文卷第一、周易音義)
- 2 古本にはこの八字がない。古本無此八字及注文(阮元撰盧宣旬摘録、周易注疏校勘記卷九。)正義は情謂実情、偽謂虚偽、と解している。
- 3 上繫にも是故知鬼神情伏(11)、設卦以尽情偽(51)の概念は見えるが、下繫ほどの機能を果していない。
- 4 剛柔相推而生變化、是故、變化者進退之象也、剛柔者昼夜之象也(4・5)と説いている。
- 5 下繫には衷期无数(19)と見えているだけである。この数は限数の意味であつて、易に見える数の哲学とは無関係である。(正義曰、无日月限数也)